

---

# アクロスティック

砂月-SATSUKI-

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アクロステイック

### 【Nコード】

N9646L

### 【作者名】

砂月 - SATSUKI -

### 【あらすじ】

初の短編小説です。言うなれば「アクロステイック」を使った物語です。アクロステイックとはなに？という人は、この小説に隠された暗号を解読すれば解るかも。

### 注意

暗号を解読しても、油断は禁物！作者はテスト前にも関わらず、二種類の暗号文を隠しました！だから二種類の暗号文を解読しない限り、物語を解読したことはありませんよ（学生の皆さんはちゃんと

勉強しましょう、決してまねは禁物)

ああぞら。いかみたいな雲。うなぎ食べてえ。ええっ『え』は『えのきだけ』の『え』！

「おっ、『お』は『おでん』の『お』……。で。こんの。んで、何であいうえお作文なのよ。につき、怒るよ！何サボって駄文なんて書いてるの。『ち』、鼻血を今日も出してあげようか、ねえ、また必殺パンチ出すよ。はあ……。こんのって、いつもそうなんだから」

「のぞみ、いや今はシナモン狂の『につき』か、……。いいか、俺の書く作文は『作品』なんだ、だから必殺技なんか出すな、原稿に俺の血なんか付いたら困る」

さあっ、続きだ——と言わんばかりに紺野（こんの）はまた机に向かい、あいうえお作文を書き始める。くちに入れたニツキ飴が無くなり、また一つをつまんでなめながら手に持っていたバイオリンを奏で始める青野希美（あおのぞみ）。ひいて出るメロデーはとても非道いモノで、普通の人ならばきつと気絶する程の威力を持つだろう。

んで、何でお前だけいつも此処に居るの。よんで文章の間違いを直す——改稿作業をしていた紺野が聞く。んっ、私のメロデーじゃ死なないの。でなくて、につき、話を逸らすな、俺の質問に答えろ。いいたくなかった希美ことシナモン好きのにつきはポケットからまたニツキ飴を取り出し、今度は紺野の口に投げ入れる。ただ一人しか居ない文芸部の君が好きなんだ。だから、私の方を向いて——。きいてくれないよね、そんなこと。あまつたるい口の中とは正反対に、焦りが体全体に伝わってくる。りたいあっ！と心で叫んで、いつものように紺野の顔必殺顔面パンチを入れたい。が、今日それ

は許されない。

とうとう日も暮れだし、タイムリミットも近づいてくる、今日は告白しなければ。うう、言えないよ、でも言わなきゃ、紺野は『文章』に取り込まれてしまう。ご、言語道断っ！このままの関係だけで終わらすなんて、そんなの嫌だよ。ざっと計算して下校時間まで後、10分。いわなきゃ。まだ紺野の心が現実にあるうちに、神様の『召し使い』にされる前に。しなくては、いつか紺野は心を神様に、見たんだよ、「そろそろこの人をお願い出来るわね、私達のお告げを伝える係。キリスト君もやつと後輩が出来るわね」なんて、ひど過ぎる。ただのお人形になる前に、なんとしても、取り返すんだ、こっち側に。

「こんの、」

れい、幽霊が見える紺野はにつきの背後にシスターの格好をした金髪の女がいることに気付く。のぞみ、いや違うシナモン狂のにつきはどうやら気付いていないようだ。しかし女はこちらを見ている、声を掛けたら最期、俺はきつと取り憑かれるに違いない。

かんぺきに隙を見せていた。けり、軽い膝蹴りが顔面に入る。につき、お前殴りだけでは無く蹴り技も扱うなんて聞いてねーぞ。きーん、と耳鳴りがひどい、何か普段より暴力少女モードになってる。ぶっ、ふざけるんじゃない、と言いかけたが、その張本人は顔を赤面している。

「いたいっ、……って何赤くしてるんだ、お前は日光の猿か」

「たっ、たいじょうぶ！？ごめんなさいっ！あ、あのさ……」

「ひどいな、これはっ……まず、蹴っておいて大丈夫？は無えだろっ、しかもたいじょうぶってどういう言い間違いが出来るんだよ、いつもは殴りのくせにおら、何か言いたいのか」

「と、とっぜんだと思うけど……私はこんの、紺野のことが、す……き……で」

はっ、やっぱりな、来た、爆弾発言。かんかんに怒ったにつきの必殺パンチが繰り出される。んっ言っんじゃなかった、こんのっ、本当にサイテーっ。そっ、そんなに怒るなよ、分かったから。ううっ、私はねっアンタの目を覚まそうと……。おいおいっ、泣くなっ。ねえ……！分かっているの、だからあ……。

「がつつくなよ、俺は否定してる訳じゃ……。」「いった瞬間、彼女はいきなり抱きついた。しめっているのは、につきの涙のせいだ。まずいって、と言つてもにつきの泣き顔は治りそうにもないので、暫くこうしていることに。すごく困るが、本当はそうまんざらでもない、俺はにつきの背中を通してシスターを軽蔑の目で見た。

「っっ、まさか彼女がいたとは、そろそろ貴方をこちら側へ移そうと思いましたが。てこずらせますね、いい加減にしてくれませんか、せっかく神の使いになれる良い機会ですのに」

きいっ、とシスターは俺を睨みつける。いまの彼女——シスターの姿をしているが、自称女神の女は何も出来ない。てこずらせる？

んなこと言われても、俺にはそうする気はさらさら無い。『るーる』を破った貴方は罪を十分に償った、だからこつち側に来なさい。」「だね、ってかそう言うだったら何で強行手段を取らないんだ？ お前が女神ならば、そんなこと簡単に出来るんじゃないやねえの。かつてに貴方が私の『力』を封じ込めたからです。なこと、知るか、俺はお前をただの幻としか思っていない、じゃあな。ちつ、と言いき捨てると幻は消え失せた。

がん、と頭が痛む、いつものことだ、たまにその幻を現実だと錯覚して錯乱寸前まで心を持っていかれる。うれしくないことに、それは俺があつちに連れていかれるまで続き、隙さえ有れば直ぐに襲い掛かる。よぶこえは一日中毎日聞こえる。ん、だからこそ俺は逆に利用してやる、今はあいいうえお作文だが、いつかはそれを物語にしてやり、あいつらの『お告げ』では無く、俺の『作品』にしてやる、何が神様だ、俺は俺で生きていく。

「で、気は済んだか？」

「きつ、まだ済んでないよ。て、でもねっ、本当に良かった、こんのって駄文しか書かない非常識人だと思っていたの、いつも文章のことしか考えていなくて。くそっ、と思つたよ、本当はコントラバスしか弾けなくてバイオリンも弾けない私には目もくれなくて……でも、これからは。れんあいしてくれるんだよね、こんのでも。」

るびい色の空だあ、とにつきは言った。かぜでもひいたのか？ 今日のにつきは本当に変だ。なあ、と言い掛けたがそのるびい色に真っ赤に焼けた空とシナモンの懐かしい彼女の匂いに目を細め、俺は現実に生きていくんだと実感した——勿論、につきと共にこのやりがいのある『現実』に生きていくんだと。

## （後書き）

最後まで読んで頂きありがとうございました！  
どちらかと言うと、暗号の方に力を入れたので、表現がおかしかったり、ストーリー的には駄文かもしれませんが  
（ ; ）

暗号のヒントは小説をよく読めば分かります！  
ではありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9646/>

---

アクロスティック

2010年10月25日09時23分発行